3 依存

高齢者にとって怖いものは死ではない、と超高齢者が教えてくれる。死よりも、いずれ起こってくること――聴覚や記憶、親友、自分らしい生き方を失うことが怖い。フェリックスが私に言ったように、「老いるとは喪失の連続だ」。小説『エブリマン』の中で、フィリップ・ロスがもっと辛口に言い表している――「老いは闘いではない。老いは虐殺だ」。

運と几帳面さがあれば――食事に気をつけ、運動し、血圧を保ち、必要なときには受診したりしていれば――かなりの人が人の手を借りずに長く生きていける。しかし最後には、身体的にも精神的にも自分一人では日々の些事を処理できなくなるぐらい能力が衰えていく。突然ころっと死ぬ人はごくわずかで、大半の人は自立が不可能なぐらい衰え、弱った期間を長く過ごさなくてはいけない。

このような最後を考えるのが好きな人はいない。その結果、大半の人は備えをしていない。介護が必要になったときにどう生きるかについては、何をするにしてももう手遅れというときまで、一瞥する程度でめったに注意を払わない。

フェリックスがこの曲がり角にさしかかったとき、補整靴を履くべき足は彼の足ではなかった。ベラの足である。一年一年、不自由になっていく彼女を私も見ていた。フェリックスは九〇代になっても驚くほど健康だった。医学的な危機はなく、毎週の運動メニューをこなしていた。神学校の学生相手に老年期医学の授業とオーチャード・コーヴの保健委員を続けた。車の運転もやめなかった。しかし、ベラは衰えつづけた。視力を完全に失った。聴力は悪化した。記憶障害は顕著になった。夕食を一緒にしたとき、私が前に座っていることをベラに二度以上教えなければならなかった。

フェリックス夫婦は失ったものを惜しんだが、同時にまだあるものを喜んでいた。ベラは私や他のよく知らない人のことを覚えられないかもしれないが、人とともに過ごし、会話することを楽しみ、求めていた。さらに、二人には何十年と続く二人だけのプライベートな会話があり、それは止むことがなかった。妻を介護することにフェリックスは大きな目的を見いだしており、彼女も同様に夫のために生きていることに意味を感じていた。お互いが実際に存在していることがお互いの癒やしになっていたのである。フェリックスがベラを着替えさせ、風呂に入れ、食事介助をした。歩くときは手をつないだ。夜は互いに腕枕をして横になった。しばらく身体を互いにすり寄せ合ってから、深い眠りに落ちた。この瞬間が、フェリックスは言う、残っているとても大切なものの一つだ。連れ添ってからもうすぐ七〇年になる今までの年月の間で今が一番、二人がお互いをよく知り、愛し合っている、と言う。

しかし、ある日の経験から、この生活がいかに脆くなっているかを二人は目の当たりにすることになった。ベラが風邪を引き、分泌物が耳に溜まった。鼓膜が破れ、耳がまったく聞こえなくなった。たったこれだけで二人の間の糸は完全に断ち切られてしまった。目と記憶の障害に加えて、耳も聞こえなくなったことでフェリックスはベラとのコミュニケーションがとれなくなった。ベラの手に字を書いて伝えようとしたが、彼

女には理解できなかった。単純な作業――着替えなど――が彼女を悪夢のような混乱に陥れた。基盤になる感覚を失ったことで時間の感覚も失われた。昏迷がひどくなり、時には妄想的になったり、興奮したりするようになった。フェリックスでは介護できなくなった。彼は疲れと不眠で疲弊した。

何をすればよいのかわからなかったが、このような状況に対処する仕組みはあった。施設のスタッフは彼女をケア付き介護ユニット――要介護者フロア――に移すことを勧めた。フェリックスはそれは考えることも嫌だった。ノー、と返事した。ベラは私と一緒の家で過ごすのだ。

移動させるまえに猶予期間があった。二週間半の試練のあと、ベラの右耳の鼓膜が治癒した。左耳の聴力は完全に失われたものの、右耳は再び聞こえるようになった。

「コミュニケーションはさらに難しくなったが」、フェリックスは言う。「最低限、可能だ」

もし、またベラの右耳が聞こえなくなったり、あるいは他の何か大変なことが起こったとしたら、どうするつもりかとフェリックスに尋ねると、彼はわからないと言う。「ベラの世話が私に手に負えなくなったときに何が起こるかを考えるのが怖い」、と彼は言う。「あまり先のことは考えないように努めている。来年のことは考えない。それだけでも憂うつになるから。来週のことだけ考えるようにしている」

これは世界中のすべての人が辿る道であり、その気持ちもわかる。

しかし、それは裏目にも出やすい。遅かれ早かれ、怖れていた危機がやってくる。二人が一緒に散歩しているとき、突然ベラが倒れた。フェリックスには何が起きたのか見当がつかなかった。二人はゆっくり歩いていた。地面は平らだった。彼はベラを腕で支えていた。しかし、ベラはぐしゃっと潰れるように倒れ、両側の腓骨――膝から踵の外側にある長くて細い骨――を骨折した。救急室の医師は膝の上から両足にギブスをはめた。フェリックスがもっとも恐れていたことが起こったのである。ベラが必要とする介護は彼にとっ

ては途方もないことになってしまった。ベラを要介護者フロアに移さざるを得なくなった。二四時間、介護士と看護師が世話をしてくれる。

読者の中には、身体的介護の負担が軽くなることによって、ベラとフェリックスがほっとしたはずだと思う人がいるかもしれない。しかし、実際の経験はもっと複雑だった。一つには、介護スタッフは専門職以上でも以下でもない。フェリックスが長い間、苦心してきた作業――入浴や排泄、着替えなどなど重度の障害をもった人に必要なすべての日常生活のサポート――の大半をスタッフが引き取った。ベラといるときも、一人のときでも、自分の時間を気ままに使えるよう、フェリックスの負担がないようにした。しかし、こうしたスタッフの努力のひとつひとつのせいで、スタッフの存在自体がフェリックスとベラをいらつかせるようになった。あるスタッフはベラを人としてではなく、患者として扱うことが多かった。髪の漉き方一つをとっても、彼女なりの好みのやり方があるが、誰もそれを知ろうとはしなかった。どう食事を切り刻めばベラが難なく飲み込めるか、どう座らせれば快適に感じるか、どう着替えさせれば喜ぶか、それぞれについてベストのやり方をフェリックスが編み出していた。しかし、そのやり方をフェリックスがスタッフにどれだけ教えようとしても、ほとんどのスタッフはポイントを理解しなかった。イライラのあまり、時にはスタッフがベラにやったことをフェリックスが自分で最初からやり直すことがあり、双方に衝突と反感が生じた。

「みんなそれぞれのやり方をやっていたんだ」、フェリックスは言う。慣れない環境がベラを混乱させることも心配していた。数日後、ベラをまた元の家に戻すことに決めた。どう彼女を扱うか、自分で考えればよいと思った。

二人のアパートと要介護者フロアの場所は階が違うだけである。しかし、それが大きな変化をもたらした。どこがどう違うのかを正しく示せる人はいない。フェリックスは二四時間、ケアに当たる看護師や介護士を

雇い入れることになった。そして、ギブスが外れるまでの六週間はフェリックスを身体的に疲弊させた。しかし、安心もした。

フェリックスとベラは生活を取り戻したように感じた。ベラにとっては、自分の場所で、自分のベッドにいて、夫もそばにいることが大切だった。そして、それが彼にとっても重大な意味をもった。なぜなら、ギブスが外れてから四日後、再び歩くようになってから四日後、ベラが亡くなったからだ。

ランチのために二人は座った。ベラはフェリックスに向き直り、言った、「調子がよくないの」。そして、倒れた。救急車がすぐに来て、近くの病院へ運ぼうとした。フェリックスは救急士を邪魔したくなかった。彼らのするに任せて、後から自分の車で追いかけた。救急車が病院に到着してから、彼の車が到着するまでの短い間に、ベラは息を引き取った。

三カ月後にフェリックスに会ったとき、彼はまだ気落ちしていた。「まるで自分の身体の一部がなくなったみたいに感じるよ。手足がもがれたみたいだ」、と彼は私に語る。声は枯れ、目を真っ赤に腫らしていた。しかし、一つ、大きな癒やしがあった――ベラは苦しまなかった。人生最後の数週間を長く愛した暖かみのある家で平安に過ごすことができた。介護病床の中で、自分を失い混迷した患者としてではなく。

自宅を離れることについてはアリス・ホブソンも同じように嫌がっていた。わが家こそが自分が所属し、自分が自分の人生の主人公だと感じられる場所だった。しかし、不審な男たちに金を脅し取られた事件以降、一人暮らしを続けることは安全とはいえないこともはっきりしていた。私の義父は祖母と介護施設を見学することにした。「母はどうでもいいよ、という感じだった」とジムは言っていたが、アリスはまわりに合わせるつもりだった。ジムはアリスの好みに合った場所、やっていけそうな場所を見つけると勢い込んでいた。

しかし、そうなるはずはなかった。起こったことを後で知ってから、その理由が次第に私にもわかってきた――そしてそれが、今ある要介護者・障害者に対するケアのシステム全体に対する疑問につながっているのだ。

家族が車で行き来できる範囲で、アリスの家の売却代金で賄える施設をジムが探した。「継続ケア」を提供してくれる施設をジムは望んだ――私がフェリックスとベラに会ったオーチャード・コーヴのようなところで――自立生活できるアパートメントに、何かあればすぐに人を呼べる二四時間介護付きのフロアが隣接しているものである。近所から遠方、営利から非営利まで、さまざまな見学先を見つけてきた。

最終的にアリスが選んだのは高層ビルに入った高齢者向け住宅である。ここではロングウッド・ハウスと呼ぶことにする。聖公会に所属する非営利の施設である。ジムの家からは車で一〇分しかかからない。コミュニティは活発で人も多かった。アリスと家族にとっては、ここが飛び抜けてよい場所に見えた。

「他のところはたいてい儲け主義だった」、ジムは言う。

一九九二年秋、アリスは入居した。1DKの自立生活アパートは私が思っていたよりも広かった。フルサイズのキッチンがついており、アリスのダイニング・セットを置くのに十分な広さがあり、さらに採光もたっぷりだった。私の義母であるナンは内装の塗り直しを確認してから、前から母親が使っていた部屋飾りを取りつけ、家具と絵の設置を手伝った。

「部屋に入ってから、そこに自分のものがいつもの場所にあるのを見つけるのは、とっても意味があるのよ――キッチンの引き出しに自分のナイフとフォークが入っているように」とナンは言う。

しかし、入居の二、三週間後に見に行ったとき、アリスは幸せそうにも順応したようにも見えなかった。一言も文句を言わなかったし、怒りや悲しみ、苦しみを含むことは何も言わなかったが、前には見たことも

ないような引きこもり方をしていた。アリスはアリスのままだったが、目の奥の光が失われていた。

最初、私は車と自由がなくなったせいだと思った。ロングウッド・ハウスに入居したとき、彼女はシボレー・インパラも持ち込んできていて、運転する気満々だった。しかし、入居して一番最初の日、近所に買い物に出かけて帰ろうとしたとき、車がなかった。警察に電話し、盗まれたと訴えた。警察官が到着し、調書をとり、捜査を約束した。しばらくしてジムが到着した。彼がふと思いついて、隣接するジャイアント・フード・ストアの駐車場を探してみた。車はそこにあった。アリスは混乱して違うところに駐車し、そのことに気づかなかったのだ。あまりに恥ずかしくてアリスは運転を諦めることにした。一日で、彼女は車とわが家を失ったのだ。

しかし、アリスの喪失感と悲哀を増したものは他にもっとあるようだった。キッチンはあったが、料理するのを止めてしまった。ロングウッド・ハウスのダイニングルームでみなと一緒に食事をとったが、わずかしか食べず、体重は減り、話し相手はいない様子だった。グループ活動も避けた。以前は楽しみにしていたものであってもである――自分の教会では参加していたような編み物サークルや読書会、ジムやフィットネスのクラス、ケネディーセンターへの外出などに参加しなかった。もし、本人の気に入るものがなければ、自分から活動を組織することも施設は認めていた。しかし、アリスは自分を閉ざしたままだった。まわりは彼女がうつ病になったと考えた。ジムとナンは母親を医者に連れて行き、薬を処方してもらった。何の役にも立たなかった。グリーンキャッスル通りにあったアリスの昔の家とロングウッド・ハウスの間の七マイルの距離のどこかで、彼女の人生は本人の望まない方向へ根本から変わってしまい、それをどうすることもできないのだった。

ロングウッド・ハウスのような居心地のよいところに住みながら不幸というのは、時代を変えれば冗談のように見える。一九一三年にコロンビア大学の大学院生のマーベル・ナッソーがグリニッジ・ヴィレッジに住む一〇〇人の高齢者の生活状況を調査した[1]――女性六五人、男性三五人である。年金や社会福祉以前の時代には、みなが貧しかった。二七人だけが生活費を自分で賄うことができた――貯金を取り崩したり、家賃収入があったり、新聞売りや清掃、傘修理などの小間仕事をしていた。大半は病気や障害のために働けなかった。

ナッソーがミセスCと名づけた六二歳の未亡人を例にあげよう。家事手伝いで、石油ストーブがひとつあるだけの小さな屋根裏部屋一室の家賃と生活費をまかなっていた。最近、病気のために仕事を止めざるを得なくなり、今は静脈瘤で腫れ上がった足を抱えて寝たきりになっている。ミスSは「尋常ならざる病」に侵され、糖尿病をもつ七二歳の兄と暮らしている。インシュリン治療以前の時代であり、兄は急速に動けなくなり、痩せこけて亡くなった。元港湾労働者の六七歳のアイルランド人、ミスターMは脳卒中で麻痺したまま放置されている。大半が単に「衰弱している」とされている。ナッソーとしては年を取り過ぎて自分の身の回りのこともできなくなった状態だったと言いたかったようだ。

家族が引き受けないかぎり、こうした人たちは当時のいわゆる「救貧院」に入る以外には事実上、選択肢がなかった[2]。こうした施設の始まりは欧米では何世紀もさかのぼる。子どもや使い崩せる資産を持たない、援助を必要とする高齢者にとっては救貧院が唯一のシェルターだった。救貧院に入れられることは気味悪い、醜悪な場所に閉じ込められることだった――当時はみながそう言っていたのである。あらゆるタイプの貧民を収容していた――年老いた貧困者やツキに見放された移民、若いのんだくれ、精神病者――そして救貧院の役割はわがまま勝手や不道徳な行為を犯したとされる「収容者」を働かせることだった。年老いた貧困者

に対しては、監督は通常、ゆるめの仕事を割り当てた。しかし、それ以外は他の被収容者と変わりない。夫婦は引き離された。基本的な身体的ケアは存在しない。不潔と荒廃が当然だった。

一九一二年、イリノイ州慈善事業委員会が出した報告書は、某郡にある救貧院を「家畜の収容にもふさわしくない」と表現した。[3] 南京虫に侵されたむき出しの三メートル×四メートルの部屋に年齢などの事情を考慮した様子もなく、男と女に分けられて住んでいた。「ねずみが辺りを走り回っている……食物にはハエが群がっている。……浴槽はない」。一九〇九年のバージニアでは、栄養失調やケア不足、伝染対策の欠如から結核に感染し、看取られることもないまま高齢者が死んでいく様子が報告されている。ケアに使える費用は慢性的に不足していた。その一例として、ある報告書は、徘徊する女性を見張る職員がいないために、一三キロの鉄球と鎖を女性にくくりつけることにした院長のことに触れている。

高齢者にとって、このような施設に入れられる、という考えほど恐ろしいものはないだろう。[4] それでも、一九二〇―三〇年代まで、アリスとリッチモンド・ホブソンが若かりしころ、救貧院の入所者の三分の二は高齢者だった。「金ぴか時代」の繁栄の一方で、このような状況は社会の恥部とみなされるようになった。そして、大恐慌が国全体を巻き込んだ抗議運動を引き起こした。生活を切り詰めて働いて貯めた資産が霧散したことに中産階級の高齢者が気づいたのである。一九三五年、社会保障法が成立し、米国もヨーロッパのような国民年金を創設した国々の一つになった。突如として、未亡人の未来は安泰になり、以前は金持ちだけに許される特権だった引退が大衆現象に変わった。

時を経て、工業国では救貧院は忘れられた存在になっていったが、他では依然として残っている。途上国ではありふれた存在になっている。なぜなら、経済成長によって拡大家族制度が壊れる一方、高齢者を貧困や遺棄から守れるほどの余裕はまだないからだ。インドではそうした施設の存在は無視されていることが多

いのだが、最近、ニューデリーを私が訪問したときには容易に見つけることができた。外観はまるでディケンズの本から出てきたかのようだった――あるいは、昔の州報告書の通りだった。

たとえば、グル・ヴィシュラム・ヴリ・アーシュラマはニューデリー南端のスラム街の中にある、慈善団体が運営する老人ホームである。生活排水が道路に溢れ、痩せこけた犬がゴミの山をあさっているような場所にある。ホームは元は倉庫だった――巨大なオープンスペースに、障害のある大勢の高齢者が、簡易ベッドや床に敷かれたマットレスの上で押し合いへし合いしている。まるで大きな切手を張り合わせたかのようにみえた。経営者のG・P・バガートは四〇代、てきぱきした振る舞いとプロフェッショナルらしい外見を持ち、二分おきに携帯電話の呼び出しに答えていた。八年前に神のお告げで施設を開き、寄付で運営していると彼は言う。彼によれば、空きベッドがあるかぎり誰一人として入所を断ったことがない。入所者のほぼ半数は、お金が払えなくて退職者ホームや病院から追い出された人たちである。残りの半数は、ボランティアや警察が見つけてきた道路や公園にいた人たちである。全員、機能障害や貧困などの問題を組み合わせて抱えている。

私が訪ねたとき、百人以上が入っていた。もっとも若くて六〇歳、最高齢は一〇〇歳を超えていた。一階には「中程度」の要介護者が入っていた。その中で、しゃがんだままの奇妙な姿勢で床を這っていたシーク教徒の一人に会った――手を出してつぎに足、また手を出して足とまるでゆっくり動く蛙のようだった。本人によれば前はニューデリーの上流階級地域で電器店を自営していた。娘は会計士、息子はソフトウェア・エンジニアになった。二年前、何かが起こった――彼は胸痛だと言ったが、脳梗塞が続けて起こったようだった。二カ月半入院し、麻痺が残った。医療費が跳ね上がった。家族は見舞いに来なくなった。最終的に病院が彼をここに送ったのである。バガートは、警察を通じて家族に父親が家に帰りたがっていると伝えたと

いう。家族はそんな人は知らないと言った。

狭い階段を二階に登ると、認知症など重度の要介護者が入っていた。老いた男が壁の前に立ち、息の続くかぎりの大声で音程の外れた歌を歌っていた。隣では白内障で目が真っ白になった女性が独り言をつぶやいていた。数人のスタッフが入所者の間を移動して、食事を与えたり、可能なかぎりで体をきれいにしたりしていた。騒音と尿臭に圧倒された。通訳を通じて何人かに話しかけようとしたが、みな混乱していて質問に答えられなかった。近くのマットレスに盲目と聾唖の女性が横たわり、二言三言を繰り返し大声で叫んでいた。何を言っているのか通訳に尋ねた。通訳は首を振った――言葉に意味はない――そして通訳は階段を駆け下りてしまった。彼女には耐えられなかったのである。私の今までの経験の中ではもっとも地獄絵に近い状況だった。

「この人たちは人生の旅の最後にきているんだ」と、大量に並んだ体を見ながら、バガートは言う。「しかし、彼らが本当に必要としているような場所を用意するのは私にはできない」

アリスが生きている間に、工業国の高齢者はこのような運命に陥る恐れがなくなった。豊かさのおかげで、貧困者でもきちんとした食事と専門的な医療、身体リハビリ、そしてビンゴ・ゲームがあるナーシング・ホームに入れるようになった。何百万という障害者と高齢者にとって、救貧院の中からは想像もつかないようなきちんとしたケアと安全な環境が常識になったのである。しかしそれでも、ほとんどの人が現代のナーシング・ホームを、人生の最後を過ごす場所としては恐ろしく荒廃した醜悪とも言える場所だと見ている。私たちは何か別のものを必要とし、求めているのだ。

ロングウッド・ハウスはそのために必要なすべてを有しているように見えた。設備は最新で、安全とケア

の評価は最高クラスだった。アリスの区画は彼女の自宅よりも安全で生活しやすくなっていながら、自宅のような心地よさがあった。施設側の配慮は子どもたちや親戚でも安心できるものだった。しかし、アリスには合わなかった。最後までこの場所には馴染めず、受け入れることもなかった。スタッフや家族が何をしようが、彼女はますます惨めになるばかりだった。

どうしてなのか彼女に尋ねてみた。しかし、何が不幸の原因なのか、アリスにも指し示すことができなかった。アリスが一番よく口にした不満は、他のナーシング・ホーム入所者からもよく聞くものだった――「とにかく私の家じゃないから」。アリスにとってはロングウッド・ハウスはマイホームのコピーでしかない。居場所を正真正銘のマイホームと感じられて初めて、水を得た魚のように振る舞えるのである。

二、三年前にワシントン州オリンピアのそばのセント・ヘレンズ山の麓にある自宅から退去することを拒否した八三歳のハリー・トルーマンの話を知った。[5] 一九八〇年三月、火山が噴煙を上げ、揺れ出した。第一次大戦では飛行機乗り、禁酒法時代には密造業者だったトルーマンはスピリット湖のロッジのオーナーを五〇年間続けていた。五年前に妻を亡くした。山裾の五四エーカーの彼の所有地にいるのは彼自身と一六匹の猫だけだった。三年前、雪下ろし中にロッジの屋根から転落し、足を骨折した。医師は「おまえは大馬鹿だ！」とその年齢まで働いていることを責めた。

「そっちが大馬鹿だ！」トルーマンは叫び返した。「俺は八〇歳だ、八〇歳だから自分で決めてやりたいようにする権利があるんだ」

噴火が差し迫ってくると、近辺の住民すべてに対して当局が避難を命じた。しかし、トルーマンはどこにも行く気がなかった。二カ月間、火山は噴煙を上げた。当局は避難区域を山の周囲一〇マイルまでに広げた。トルーマンは頑として動かなかった。はっきりしない、一貫しないこともある学者の言うことを信じなかっ

たのである。彼にとっては、スピリット湖の他のロッジのように、自分のロッジに空き巣が入り、荒らされることが心配だった。そして、何が起ころうとこの家が彼の人生だった。

「もしも、ここが消え去るのだったら、わしも一緒に消え去るのみ」と彼は言った。「どうしてって、このロッジがなくなったら、一週間以内にはわしも死ぬからだ」。バーボンウィスキーとコカコーラを手にしながら歯に衣着せぬ言い方を続ける、彼の頑固一徹な態度にレポーターが引きつけられた。地元警察は彼を逮捕して保護することも考えたが、諦めた。彼の年齢と逮捕した際に警察に浴びせられる批判記事を気にしたのである。トルーマンは友人に「もしわしが明日死ぬんだったら、それで最高の人生だ。何でもやれるだけのことをわしはやったし、何でもわしのやりたいことをやったことになるからな」と話していた。

一九八〇年五月一八日午前八時四〇分に、原爆なみの威力をもった爆発が起きた。大量の溶岩で湖全体が埋め尽くされ、トルーマンと彼の猫、家は下敷きになった。その後、彼は伝説の人になった――ある老人が最後までわが家に留まり、チャンスをものにした。自由な死に方を選べる可能性がほぼ消え去ったかのような時代に、自分のやり方で自分の人生を終えたのである。近くのキャスル・ロックの住人がトルーマンの記念碑を町の入口に建て、今も残っている。アート・カーニー主演によるテレビ・ドラマが放送された。

アリスの前に火山はないが、彼女もそれと同じような状況にある。グリーンキャッスル通りのわが家を諦めることは、何十年にわたって築き上げてきた自分の人生を諦めることを意味していた。さまざまな点でロングウッド・ハウスは前の家と比べて、はるかに安全で生活しやすいのだが、そうした点がアリスにとっては耐え難い。彼女のアパートメントは「自立生活（インディペンデント・リビング）」と呼ばれているのかもしれないが、以前には一度も経験しなかったような枠を押しつけられ、監視もされている。介護者が食べる様子を見ている。看護師が健康状態をチェックする。アリスの歩行の不安定さが増してきたのをスタッフが

見つけると、歩行器を使わせられる。アリスの子どもたちにとっては安心材料になるが、アリス自身は世話を焼かれたり指示されたりするのが嫌だった。そして、時が経つにつれて生活に課せられた枠は厳しくなるばかりである。アリスが薬を飲み忘れているのをスタッフが見つけて問題にし、アリスに対して、日に二回看護ステーションに降りてきて、看護師の目の前で服薬するか、そうでなければ自立生活フロアを出て、ナーシング・ホームの病棟に転棟しなければならない、と伝えた。ジムとナンはメアリーという名のパートの介護士を雇い、アリスにつかせるようにした。一人にならないように、転棟を先に延ばせるようにと考えたのである。アリスはメアリーのことが好きだった。しかし、アパートメントに一日何時間も、ほとんど何もすることがないまま一緒にいることをつづけているうちに、アリスはもっと沈み込むようになった。

アリスにとっては、いわば立ち去ることは決して許されない外国に連れて行かれたようなものである。国境警備兵はフレンドリーでにこにこしている。その国の中では、居心地よく過ごせて面倒も見てもらえることが約束されている。しかし、彼女は面倒を見て欲しいわけではなく、自分の思うように生きたいだけだと思っている。にこにこしている国境警備兵はアリスの鍵とパスポートを取り上げてしまった。彼女の家と一緒に、彼女の自由も消えてしまった。

みながハリー・トルーマンを英雄視する。スピリット湖のハリー・トルーマンがロングウッド・ハウスに移ることなどありえない。そして、バージニア州アーリントンのアリス・ホブソンにとっても、移ることはありえないことだったのだ。

超高齢者にとっての行き場所が火山に行くか、人生のすべての自由を捨てるかの二者択一になってしまったのはどうしてなのだろう。何が起こったのかを理解するためには、救貧院がどのようにして今あるような

施設に置き換えられたのか、その歴史を辿る必要がある――そして、それは医療の歴史にもなっている。今あるナーシング・ホームは、弱ったお年寄りに悲惨な場所とは違う、よい暮らしを与えようという願いから始まったものではない。全体を見渡し、こんなふうにまわりに問いかけた人は一人もいなかった、「みなが知っているように、人生には自分一人では生活ができない時期というのがある、だから、その時期を過ごしやすくする手段を私たちは見つけなければならない」。このような質問ではなく、かわりに「これは医学上の問題のようだ。この人たちを病院に入れよう。医師が何かしてくれるだろう」。現代のナーシング・ホームはここから始まった。成り行き上そうなったのである。

二〇世紀の中ごろ、医学は急速な歴史的な変革を経験した。[6] それまでは重病人が来たとき、医師は家に帰らせることが通常だった。病院の主な役割は保護だった。

偉大な作家兼医師であるルイス・トーマスが、一九三七年のボストン市立病院でのインターンシップの経験をもとにこのように書いている。「もし病院のベッドに何かよいものがあるとしたならば、それはぬくもりと保護、食事、そして注意深くフレンドリーなケア、加えてこれらを司る看護師の比類ないスキルだ。生き延びられるかどうかは疾病それ自体の自然な経過にかかっている。医学それ自体の影響はまったくないか、あってもわずかだ」

第二次世界大戦後、状況は根本的に変わった。サルファ剤やペニシリン、そして数え切れないほどの抗生物質が使えるようになり、感染症を治せるようになった。血圧をコントロールしたり、ホルモン・バランスの乱れを治したりできる薬が見つかった。心臓手術から人工呼吸器、さらに腎臓移植と医学の飛躍的な進歩が常識になった。医師はヒーローになり、病院は病いと失望の象徴から希望と快癒の場所になった。

病院を建てるスピードは十分ではなかった。米国では一九四六年に連邦議会がヒル・バートン法を成立さ